

2026年5月29日19:30~21:30 Zoom 開催
(一社) 大学女性協会 主催 CSW70 参加報告会



境界線の上で紡ぐ真実

— CSW70で目撃した「実態」と「エージェンシー」

JAUW代表団としての10日間の所感

(報告会后加筆版)

稲葉 みどり (JAUW/愛知支部)

本稿の構成

1. タウンミーティング（理想とトークニズムの超克）
2. サイドイベント（女性裁判官・ジェンダー正義などのテーマ別考察）
・ジェンダー正義プラットフォーム（Gender Justice Platform）と各国の本音（追加）
3. 政府ブリーフィング／派遣生の発表（マクロな政策と、内なる課題の接続）
4. ニューヨークでの生活（聖域都市の光と影、生の現実）
5. CSW70 全体のまとめ（北京+30へのロードマップと覚悟）
6. コラム：デジタル技術（AI）と司法アクセスの交差点（追加）
7. キーワード解説（追加）
8. 質問回答（追加）
9. 世界の動きと「北京+30」への期待・謝辞



1. タウンホールミーティング（事務総長との対話）

● 理想とトークニズムの超克（Beyond Tokenism）

- グテレス事務総長からのメッセージ：
 - “When you push for change, you are shaking the foundations of patriarchy and privilege. You are **the foundation-shakers**. We must counter the **backlash** and push forward together.”
 - 「皆様が変革を求めるとき、それは家父長制と特権の基盤を揺るがしているのです。皆様こそが『基盤を揺るがす人々（ファウンデーション・シェイカーズ）』です。私たちは権利への逆風（バックラッシュ）に対抗し、共に前へ進まなければなりません」
- ユースの実質的な参画（**Meaningful Youth Engagement**）への問いかけ

Buswards

日本語訳

要約

Foundation-shakers	基盤を揺るがす人々	既存の家父長制や特権構造に挑み、社会の根本的な変革を迫る変革の担い手たちのこと。
Tokenism	トークニズム（形だけの参画）	若者やマイノリティを壇上に立たせるなど、実質的な権限を与えないまま「見せかけの多様性」を演出すること。
Meaningful Youth Engagement	ユースの実質的な参画	飾りとしての参加を超え、若い世代が政策決定やシステム変革に若者自身の意志（Agency）を持って対等に関わること。
Gender Backlash	ジェンダーへの逆風	世界的に見られる、ジェンダー平等や女性の権利伸張に対する保守的な反動や権利の後退運動のこと。

国連事務総長事務局およびUN Women 総長のスピーチ

国連事務総長および市民社会とのタウンホールミーティング 3月10日 午前10時～午前11時



#SGTownhall

EXECUTIVE DIRECTOR UN-WOMEN

Dear friends, dear feminists

#CSW70 #FORALLWOMENANDGIRLS

UN WOMEN

国連事務総長事務局およびUN Women 会議場の様子
国連事務総長および市民社会とのタウンホールミーティング 3月10日 午前10時～午前11時





WYDE
Women's Leadership

**#CSW70 Side-Event:
Intergenerational solidarity
for advancing young
women's leadership**

13 March
11.30 am-12.45 pm

Conference Room 2
United Nations
Headquarters, NY

#WYDEWomenLeadership



Funded by
the European Union



Inter-Parliamentary Union
for democracy for women



UCLG
CGLU
United Cities
and Local Governments



Event co-sponsored by:



The Permanent Mission of Denmark
to the United Nations



Government Offices of Sweden

WYDE女性リーダーシップ:若い女性のリーダーシップ向上のための世代間連携
3月13日 午前11時30分~午後12時45分会議棟 第2会議室(最大収容人数:571名)



2. サイドイベント（司法アクセスとジェンダー正義）

- 司法への包括的アクセス（Access to Justice for All）
- 女性裁判官のリーダーシップと「ジェンダー正義プラットフォーム」
- 権利の非人間化（Dehumanization）と構造的な使い捨て（Systemic Disposability）への抵抗



Busswards	日本語訳	要約
Access to Justice for All	すべての人のための司法アクセス	CSW70の最優先テーマ。法制度や裁判所を利用する権利だけでなく、あらゆる女性・女児が法的に保護される権利。
Systemic Disposability	構造的な使い捨て	社会や経済の都合で特定の労働力（移民女性等）を利用しながら、法的な保護を与えず都合よく排除する構造の歪み。
Dehumanization	非人間化（記号化）	弱い立場にある人々を「不法」などのラベルで記号化し、一人の人間としての尊厳や痛みに社会が鈍感になること。
Judicial Leadership	司法におけるリーダーシップ	女性が単なる被害者や法の利用者ではなく、裁判官など「法の執行者・変革者」として主導権を握ることの重要性。

補足: ジェンダー正義プラットフォーム (Gender Justice Platform) と各国の本音

【プラットフォームの概要】

UNDP (国連開発計画) と UN Women が 2022 年に立ち上げた、司法の男女格差解消のための共同プロジェクト。

【積極的支援国の動向: オランダ・ドイツ・カタール】

- オランダ・ドイツ: 「フェミニスト外交政策」を掲げ、司法のデジタル化や性暴力被害者に配慮した「サバイバー中心の司法」に多額の資金を提供。
- カタール: 「国際女性裁判官の日 (3月10日)」の制定を主導。中東地域における女性の司法参画のロールモデルを目指す戦略的関与。

【対立と逆風 (Gender Backlash) のファクト】

- 本会議の「合意結論」が CSW 史上初の投票 (賛成 37、反対 1: 米国、棄権 6: エジプト、サウジ等) に纏れ込んだ背景。人口動態や伝統的価値観、ジェンダーの定義を巡る国家間の激しい思想的対立 (本音のぶつかり合い) が可視化された。
- (UNDP、UN Women、IAWJ、GQUAL、ドイツ、カタール、オランダ 女性裁判官が主導権を握る: ジェンダー正義プラットフォームを通じて女性の司法リーダーシップを強化 3月12日) より

UNDPとUN Womenは、ブラジル、オランダ王国、ウクライナ、コンゴ民主共和国 (DRC) の政府と協力して、女性の司法へのアクセス促進：脆弱な状況下でもすべての人に恩恵をもたらす司法制度の構築 3月11日、午前10時～午前11時15分 総会棟第8会議室



3. 政府ブリーフィング（マクロとミクロの接続）

- 政策の一貫性（**Policy Coherence**）と国内適用（**Domestic Implementation**）
- 外務省派遣生による日本の国際貢献の発表
- 外向け（国際支援）と内向け（国内課題）の交差性（**Intersectionality**）



Buswards	日本語訳	要約
Policy Coherence	政策の一貫性	国際社会に掲げる「誰一人取り残さない」という外交的公約が、自国の国内政策とも矛盾なく一致しているかという視点。
Domestic Implementation	国内への適用（実施）	国連などの国際舞台で合意された国際規範や基準を、絵に描いた餅にせず、自国の法律や社会制度に落とし込むこと。
Intersectionality	交差性（インターセクショナルリティ）	ジェンダー、国籍、階層、言語の壁など、複数のマイノリティ属性が重なり合うことで、差別や孤立が深刻化する現象。

4. ニューヨークでの生活（生の現実）

- 都市空間における生の現実（**Lived Realities in NYC**）
- 「聖域都市（**Sanctuary City**）」の光と影
- 一歩外に出れば誰もが直面する、脆弱性とエージェンシー



Busswards	日本語訳	要約
Lived Realities	生の現実（生きられた現実）	統計データ（ファクト）だけでは見えてこない、現場の街角や生活空間で人々が実際に直面している苦難や生の営み。
Sanctuary City	聖域都市	ニューヨーク市のように、不法滞在であっても移民の人権や行政サービスを一定程度保護する姿勢を掲げる都市のこと。
Primal Agency	原始的な自己決定権	既存の法や保護が届かない極限状態（境界線上）にあっても、人間が自らの意志で生き抜き、選択しようとする本能的な力。
Vulnerability	脆弱性／守られるべき弱さ	言語の壁や制度の狭間で孤立し、社会構造によって容易に権利を奪われ得る「剥き出しの弱さ」のこと。対象を単なる「支援される弱者」と記号化せず、誰もが境界線上（ボーダー）で直面し得る人間共通の課題として捉える視点。

5. 全体のまとめ & 未来への予告

- 北京+30ロードマップ (**The Roadmap to Beijing+30**)
- 理想を形にする責任 (**Accountability over Rhetoric**)
- 「黄金のマスターキー (**The Master Key**)」を手に、
- 次なる主戦場へ (**A Compass for the Future**)



Buswards	日本語訳	要約
Beijing+30	北京プラス30	『北京宣言から30年 (Beijing+30)』
Accountability	実行／説明責任	約束したことを本当に実行する責任
The Master Key	黄金のマスターキー	表面的な美辞麗句 (レトリック) を見抜き、言語 (英語) と技術 (AI) を武器に、真の変革の扉を開けるための知性と共感。
Transformative Change	本当の改革	ここでは、言葉の仮面を剥がす本当の改革

結 び:「保護から主体性(エイジェンシー)へ」

- 「エイジェンシー」は、女性やユースの『主体的な行動力』を指す。
- 「なるほど、今回の国連女性の地位委員会(CSW70)では、女性を『守られるべき弱者』としてではなく、『社会を変革する主役(エイジェンシー)』として捉え直しているんだな!」(稲葉所感)
- 「誰かから与えられる保護を待つ弱者ではなく、自らの意志で社会を変えていく主役(当事者)としての力」と定義すること。
- これこそが、国連のきらびやかな議論の根底にある最も熱いメッセージであり、私が現地で掴み取った本質そのものです。
- JAUWの会員の皆様にとっても、「保護から主体性(エイジェンシー)へ」という視点は、これからの日本の教育や社会活動を考えていく上で、間違いなく一番深く響く「知のシェア」になると思います。

コラム：デジタル技術（AI）と司法アクセスの交差点

【デジタル・ジェンダー・ギャップと「収支」の不均衡】

- 現状のファクト：世界にはインターネットやデジタルインフラに繋がらない女性が依然として何十億人も存在しており、国連（ITUやEQUALS）ではこれを基本的人権に関わる重大な「怠慢（Neglect）」と捉えています。
- また、女性がデジタルから排除されている現状は、世界経済における「巨額の赤字（損失）」であると合理的に試算されています。

【バイアスと貧困の関わり】

- 単に「スマホを持たせる」だけでは問題は解決しません。女性の多くは無償のケア労働等により資産が少なく、金融包摂（Financial Inclusion）やデジタル上の言語能力（Digital Literacy）の不足から、経済的脆弱性（Economic Vulnerability）に置かれています。
- さらに、現在開発されているAIやアルゴリズムの多くは特権層の男性目線で設計されているため、既存のジェンダーバイアスをそのまま学習し、女性の被害の訴えを取りこぼすような「アルゴリズムの偏向（Algorithmic Bias）」というシステムの欠陥を抱えています。
- （コラムは、ITUおよび加盟国/国連システム機関 CSW70におけるEQUALS 2.0:デジタル社会における女性の参加:コミットメントから実現するシステムへ 3月13日 より）

コラム:「恐怖なしの参加 (Without Fear)」とこれからの実行責任

【メリットと新たな脅威】

- デジタル司法 (オンライン相談やモバイル・ジャスティス) は、地方や過疎地において身動きが取れない女性や、家庭内の目が気になって助けを呼べない女性にとって、こっそり権利を守るための「デジタルの窓口」として機能する大きなメリットを持っています。
- しかしその一方で、AIを悪用したディープフェイクやオンライン上の組織的ハラスメント、監視テクノロジーの悪用といった「サイバー暴力 (Cyber-Violence)」が急増しており、女性活動家やジャーナリストが恐怖によって沈黙させられるという、民主主義の深刻な危機 (Shrinking Space) を招いています。

【これからの課題】

- オーストラリアの性差別問題担当委員らが突きつけたように、「女性と女児が『恐怖なしに (Without Fear)』参加できる安全設計」がシステム側の必須条件 (前提条件) です。企業側の自主規制 (言い訳) を許さず、違反には罰則を科すような「実効性のある法規制 (Legislation with teeth)」や保護義務 (Duty of Care) を国家とビッグテックに課すこと、そして「スキルを教えるだけでなく、彼女たちが雇用され、経済的自立 (Economic Autonomy) という『力』を手にする出口までをセットで保障すること」こそが、これからの国際社会が果たすべき真の実行責任 (Accountability) です。

ITUおよび加盟国/国連システム機関

CSW70におけるEQUALS 2.0: デジタル社会における女性の参加: コミットメントから実現するシステムへ

3月13日 午後3時~午後4時15分 総会棟第8会議室(最大収容人数:96名)



【Accountability (アカウンタビリティ) / キーワード解説】

- 日本語訳: 説明責任 / 実行責任
- 解説: 国連や各国政府が掲げた「誰一人取り残さない」という美しい公約 (レトリック) を絵に描いた餅にせず、市民社会に対して進捗を明確に「説明する責任」。
 - ※政策や資金が正しく使われ、市民社会 (NGOやユース) に対して明確に「説明し、検証を受ける義務」のこと。
- そして、予算や具体的な行動を伴わせて本当に「約束を実行する責任」(未来志向・決意を込める) の双方を指す。「会議を開いて終わり」にさせないための最重要概念。
 - ※30年前に立てた誓いがどれだけ達成されたか、その「結果」を直視し、変革を起こし続ける責任。



【 Agency (エージェンシー) / キーワード解説】

- 日本語訳: 主体性 / 自己決定権・当事者としての行動力
- 解説: 本会議において、特に「女性やユースのエージェンシー」を指す。これは、誰かから与えられる「保護」や「恩恵」をただ待つ存在(客体)ではなく、**自らの意志で選択し、社会の構造や制度を自ら変えていく「当事者としての主体的な力」**のこと。

※若者をただ壇上に飾る「トークニズム(見せかけ)」を超え、彼女たちのエージェンシーを真に解放することが世界中で叫ばれている。



ご質問への回答

- ご質問
- 「取り組みにおける国家間の温度差をどのように感じたか、各国の報告やミーティングを通して、日本に最も欠けているものは何か、感じたことがあれば教えてください。」
- 「もっとも印象に残ったことは何ですか？」
- 国連という場所は、各国の『建前(レトリック)』と『本音』が交錯する場所です。一部のセッションや資料から世界のすべてを断定することはできませんが、私が現地で目撃したファクトを交え、肌で感じた印象をテーマ別に共有させていただきます。

テーマ1:ユース(若い世代)の参画に対する各国の対応と実態

実際に目撃したファクト(事実):

- 3月10日の事務総長タウンホールミーティングにおいて、グテーレス事務総長は集まった女性リーダーやユースを「特権の基盤を揺るがす人々(Foundation-shakers)」と呼び、「権利への逆風(バックラッシュ)に決して後退しない」と熱く連帯を表明しました。
- 3月13日の「WYDE 女性リーダーシップ」セッションでは、欧州連合(EU)やポルトガル、スウェーデンなどの政府代表や国際機関が集まり、若い女性の政治参加を支援するメンターシップの制度化や、SNSでの誹謗中傷などの障壁について、世代を超えた交流(Intergenerational Dialogue)が行われていました。
- 私の印象:
- 「欧州を中心とした国々や国連トップは、ユースを単なる『若者の意見を聞く』という対象ではなく、構造を変革する主体として制度的に組み込もうとする強い姿勢が見られました。
- しかしその一方で、美しい言葉とは裏腹に、若者を壇上に座らせて見栄えだけを良くする『トークニズム(形だけの参画:Tokenism)』の罠に陥っていないかという懸念も現場で強く感じました。単に機会を与えるだけでなく、決定権をどう渡すかという点で、各国の本気度にまだ温度差があるという印象を持ちました」

テーマ2: 司法アクセス (Access to Justice) への危機感と各国の姿勢

- 実際を目撃したファクト(事実):
- 3月12日の「女性裁判官が守り抜く」セッション(UNDP、UN Women、ドイツ、カタル、オランダ等共催)では、女性が単なる「法の利用者・被害者」ではなく、裁判官や法の執行者(Judicial Leadership)として主戦場に立つ重要性が議論されました。
- 一方で、大崎麻子氏の報告資料(153-0)にもある通り、今回の「合意結論」はCSW史上初の投票に纏れ込み、米国が反対、エジプトやサウジアラビア等が棄権するという異例の事態が起きました。また、EUがNo Action Motionを発動してジェンダーの定義限定案を退ける一幕もありました。
- 私の印象:
- 「ドイツやオランダなどの欧州諸国は、司法制度の改革や女性の司法リーダーシップ強化に非常に積極的でした。しかし、合意結論が史上初の『投票』になったことが示す通り、国際社会には今、ジェンダー平等への猛烈な逆風(Gender Backlash)が吹いています。
- 司法アクセスという一見普遍的なテーマであっても、国家の利害や伝統的価値観の対立により、足並みが揃わない生々しい分断を目の当たりにしました。法的な権利が、一部の国や地域で非人間化(Dehumanization)され、構造的に使い捨て(Systemic Disposability)にされている危機感を強く抱きました」

テーマ3: ニューヨークの都市空間が示す「生の現実」

- 実際に目撃したファクト(事実):
- ユース代表の小阪氏の資料(153-2)にも指摘されていましたが、「ニューヨークという大都市へのアクセス(ビザの取得や高額な滞在費)」自体がすでに**特権性(Privilege)**を帯びているという事実。
- そして、国連の外の街角では、**無数の移民労働者が都市のインフラを支えている「聖域都市(Sanctuary City)」**としての光と影。
- 私の印象:
- 「各国政府が国連の議場で高度な外交交渉を行っている足元(ニューヨークの街角)で、最も弱い立場にある移民女性たちの**生の現実(Lived Realities)**が広がっていました。
- 先進国や**グローバルサウス**という国家間のフレームワークだけでは捉えきれない、『**一歩外に出れば、誰もが境界線の上で脆弱性(Vulnerability)を抱えて生きている**』という実態を、都市の空気から痛烈に感じました」

世界の動きと「北京+30」への期待・謝辞

- CSW70参加報告：北京+30へ向けた連帯の最前線ニューヨークで開催されたCSW70に参加し、世界中の女性平和構築者や国際機関との対話を通じて、ジェンダー平等の最前線を体感しました。特に「人道・開発・平和」の連携（Triple Nexus）における女性の役割や、デジタル技術を活用した権利擁護が熱心に議論されました。
- 来年の「北京宣言30周年」を控え、バックラッシュ（逆風）に抗う国際社会の強い意志を肌で感じる事ができたのは大きな収穫です。この知見を日本の教育・研究現場にも還元して参ります。
- 事前の勉強会から現地でのサポートまで、絶えず情報を共有し、温かく支えてくださった皆様、及び、同行して現地でご教示くださったJAUWのK様に厚く御礼申し上げます。